

ニーチェに追い駆けられて

松浦 純子

数か月前に「福岡県筑紫野市の老舗温泉で、年に二回しか湯を入れ替えなかったことが原因で、風呂から通常の三千七百倍となるレジオネラ属菌が検出された」というニュースが大きく報じられた。この話を聞いて、突如私の高校時代の担任のことが頭に思い浮かんだ。

彼は温泉に浸かるのが好きで、退職後に各地の温泉巡りを楽しんでいたらしい。そして、運悪くどこかの温泉でレジオネラ属菌を吸い込み、肺炎にかかり亡くなった。もう二十年以上前のことだったが、この菌は相変わらず人に悪さをしていると思うと、外出時ではなく入浴時こそマスクをして入った方がいいのではと考えてしまう。

さて、先生は倫理を教えていた。私も授業を受けたはずだが、ほとんど何も覚えていない。唯一記憶にあるのは、「偉い人は、切りのいい年に生まれるか死んでいる。ニーチェは一九〇〇年という切りのいい年に亡くなっているが、なかなかできることではない」という授業だった。確かにニーチェは偉い。いや偉すぎた何を言いたいのか私には全く分からない。さらに「神は死んだ」、「超人」などという不気味なことはが出てくると、理解できなくてよかったとさえ思える。

ニーチェとは高校でさよならをするはずだった。ところが、大学に入って、また出会うことになった。ドイツ語文法を全く知らないのにいきなりドイツ語購読の授業。テキストをパッと見て、二十ほどのアルファベットが続く単語がたくさんあることに驚く。さらに、上から文章を見ていくと、カンマはどこどころにあるのに、どこまで行ってもピリオッドが来ない！ もう一ページ半も探しているのに……不安に追い打ちをかけるように、先生の第一声。「このテキストはニーチェが二十歳の時に書いた日記である。諸君と同じくらいの年で書いたから、理解できるはずである」。また、ニーチェか。ドイツ語歴二十年のニーチェとドイツ語歴一日の私たちを一緒にするなんて、本気ですか？

ところで、ニーチェの最期も肺炎だったそうだ。レジオネラ属菌が原因かどうかは分からないが。